

開館20周年記念論文集刊行の辞

国立歴史民俗博物館（歴博）が本年3月に開館20周年を迎えたことを記念して、ここに開館20周年記念論文集を刊行する運びとなりましたことは、心からの慶びです。

歴博は、この間、歴史研究部、考古研究部、民俗研究部、情報資料研究部におけるそれぞれの専門研究を基礎に、歴史学・考古学・民俗学及び関連諸学の協業により、日本の歴史と文化に関する各種の先端的共同研究を推進してきました。そしてその成果は、その都度、学界に報告するとともに、研究展示という形で立体化し可視化し映像化した形で、ひろく社会に公開し還元してきました。これらの諸活動の礎となる歴博研究者の個人研究がここに示されています。歴博の日本の歴史と文化への多角的な実証的研究のあり方が、この論文集からうかがうことが出来ます。また併せて創立10周年を記念して刊行した記念論文集にも目を通していただければ、この20年間の歴博の歩みが、より明らかになると思います。

この20年間、歴博はさまざまな分野でその活動を展開してきました。

まず、大学共同利用機関としては当然なことですが、全国の大学教員等との共同研究体制を組織するなかで、各種の先端的な共同研究を進めてきました。学際的研究をめざす基幹研究は2002(平成14)年度までに「歴史資料分析の多角化と総合化」を含む10本の共同研究が既に終了し、現在は「農耕社会の形成と環境への影響」が進行中です。これらの組織的で学際的な実証研究の中で、炭素14年代測定を初めとする非文献的年代確定方法も大きく前進させることが出来るようになったのです。

また、歴博は、日本の歴史と文化に関し歴博が収集し蓄積しつづけている資料と資料情報を、整理し研究した上で、広く学界に公開し提供することも、その主要な任務の一つとしてきました。現在、収蔵資料は、国宝5、重要文化財81を含む17万点以上に達しており、蔵書冊数も26万冊になんなんとしています。この資料と蔵書の内容を可能な限り容易に検索し利用できる体制づくりに努力するとともに、歴博としては「日本古代印の基礎的研究」を初めとする全国を見渡した各種の資料目録をも多くの研究者と協力しながら作成してきました。

博物館としての歴博は、1995(平成7)年に、懸案であった日本近代を扱う第5展示室を一般公開するとともに、その共同研究を企画展示として可視化していきました。また植物を介して日本の歴史と文化を考える「くらしの植物苑」を同年に開苑しました。そして、研究の進展を常設展に反映させるため、古代、中世展示の暫定改善もおこなってきましたが、2003(平成15)年度より、開館20周年を機に常設展示の全般的なリニューアルに着手しました。この中で、最新の研究が具体的に反映されていく筈です。

共同研究、収蔵資料の整理研究公開、研究の研究展示への展開をおこなうなかで、歴博には、1999(平成11)年度より、総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻が設置され、博士後期課程の大学院生を教育することになりました。そこでは、教育の場が博物館であるという有利な条件を活用し、具体的なモノに即しモノから考えていく大学院教育が志向されています。

ところで、来年4月より国立大学法人人間文化研究機構が発足するにともない、歴博は機構を構成する5機関の一つとなり、従来よりまして、広い視野と深い理論的見通しに立った共同研究を実現させていかななくてはなりません。歴博に対し関係各位のさらなる御理解と御支援をいただきたく存じます。

2003(平成15)年10月1日

国立歴史民俗博物館長

宮 地 正 人